

2015. 12. 8

名古屋 NGO センター

龍田 成人

中部地域における協働の経緯について

ー協働のハンドブックの改訂も踏まえてー

1. 経緯と目的

2015 年度より、草の根技術協力事業「新支援型」が開始され、より多くの地域の NGO が応募参加するようになっており、各地域における NGO と JICA との連携が重要なものとなってきている。また、NGO-JICA 協議会においては、NGO 支援事業、地域提案型研修および国際理解・開発教育の分野においても、地域における連携の重要性が話されており、今後、様々な分野、スキームにおいて、各地域における NGO と JICA との連携が推進されるものと思われる。

このような時期に、今一度、協働の現状および在り方を見つめ直す機会を持てれば、NGO、JICA 双方にとって、有意義なものとなり、今後の連携をスムーズにすることができるものと考えられる。

中部地域は、NGO-JICA 間の連携の先進地域として、様々な協働優良事例を実現してきており、上記の「地域における NGO と JICA との連携」への流れをリードしてきた経緯がある。本「地域協議会」や「協働のハンドブック」も協働の枠組みおよび指針として、他の地域に大きな影響を与えており、全国のネットワーク NGO や JICA の関係機関・部署で、シンボリックな存在として認識されている。

「協働のハンドブック」は、2 年に 1 度の頻度で、見直しのプロセスを行うことが、本協議会においても、合意されている。2012 年 12 月に作成されて以来、2 年以上が経過しており、これを機に、ハンドブックの内容を共有し改訂作業を行う必要がある。

一方で、連携の発展維持には、NGO、JICA 双方の日ごろの努力と対話、オープンな環境での協議が必要である。かつて、中部地域でも、いわゆる「親子発言事件」が発生し、全国的に重要な問題になったことは、地域の NGO にとって生々しい問題として記憶に留められており、協働の在り方を見つめ直す機会は、種々の危険を未然に防ぐ効果も期待できる。

2. 提案内容

1) 拡大コーディネーター会議の開催

現コーディネーター＋αで、改訂作業の作業内容の詳細を討議。（できれば、竹内次長にも。）

2) 協働のワークショップの開催

できるだけ多くの関係者が参加してのワークショップの開催。

3) 改訂作業の実施

ワークショップの結果を踏まえた、協働のハンドブックの改訂。

4) 第 9 回 中部 NGO-JICA 中部 地域協議会での報告、承認

* 改訂の内容も重要だが、そのプロセス、参加の範囲（担当者から職制まで）も重要。

以上

協働のハンドブック（2012 年 12 月 1 日作成）からの抜粋

1-2. 協働の意義

（1）NGO/NPO と JICA の違いからの出発

市民の自由な発意に基づく NGO/NPO と、日本国政府の ODA の実施機関である JICA とは、その 成り立ちや理念、社会的な役割、予算規模・人員配置は無論異なり、その立場、視点、組織文化、地域社会へのアプローチは自ずと異なってくる。一見すると、その違いから共に協調して働くことが難しいと思われることもある。確かに、組織文化や社会的立場の違いは、両者にストレスを与え、合意形成のために時間と手間を強いることがある。

（2）困難を乗り越えても協働する魅力

しかし、その困難を、対話と相互理解によって乗り越え、両者が双方の強みを生かした協働が機能しはじめると、相乗効果や相互補完性が働き、社会的影響が大きく、質の高い事業が行えるようになり、単独では成し得ない、より大きな共通の目標やビジョンを達成できるようになる。例えば NGO/NPO は事業のスケールアップや、点から面への展開が強化でき、JICA は草の根レベルのアプローチが強化できる。また、多様なリソースの投入や様々な市民やセクターへのアプローチは、多様なニーズに応えることを可能とするとともに、幅広い国際協力への関心層や関係者の理解と参加を促し、その意識に影響を与えることが期待できる。

（3）協働から生まれるさらなる効果

さらに、協働が新しい協働を生むことも、協働の大きな魅力である。協働のために必要な対話や相互理解を通じて、担当者も、組織も、刺激を受け、成長する。視野や発想が広がり、硬直化した先入観を打ち破る力を得る。成長した担当者や組織が、さらに新しい次元の協働を生む。このように協働には、事業への参加者や地域社会に良い影響を与え、協働に参画した担当者や組織を成長させる魅力がある。地域の NGO/NPO と JICA が協働し、対話と相互理解によって、より大きな共通の目標やビジョン（「世界のより多くの人々が自己の尊厳を回復し、またお互いに認め合い、幸福を感じられる世界の実現に貢献する」「より多くの市民/国民から国際協力に対する理解を得、参画するプレイヤーを増やす」など）の達成が期待できる。

1-3. ハンドブック作成の目的・位置付け

（1）ハンドブック作成の経緯・目的

この 10 年、中部地域の NGO/NPO と JICA 中部は、様々な障害を対話と相互理解によって乗り越え、数々の協働事業を成功させてきた。この過程で、「地域の NGO/NPO と JICA 中部との協働には大きな可能性と魅力があるが、良好な協働関係を築き、より大きな成果を得るためには、お互いに対する理解、様々な配慮・留意事項がある」ことを学んだ。そこで、協働の 10 年のワークショップを開催して振り返り、「協働の有効性」と「双方の考える改善点」を明らかにし、「協働を進めるための重要事項」「協働をさらに発展させるための工夫」などについて、双方が納得する形でハンドブックとして取りまとめることにした。

（2）本ハンドブックの位置づけ

このハンドブックは、中部地域において協働を実践している地域の NGO/NPO と JICA 中部が対等な立場で参加・協議し、双方向の議論の中で作成したものである。魅力は最大限の可能性を語り、改善点は率直に指摘し受けとめ合うという内容になっている。双方これを尊重し、このハンドブックを協働する際の目安として活用する。また、定期的（2 年に 1 度）にその内容の見直しを協力して行い、各々を取り巻く環境の変化に沿ったものにしていく。

7-2. 本ハンドブック作成の過程について

本ハンドブック作成の過程では、地域の NGO と JICA 中部の双方の関係者が、事業担当者 レベルから名古屋 NGO センター(NANGOC)理事長、JICA 中部所長に至るまで幅広く参加し、合意形成を行ったもので、協働のハンドブックの作成の過程自体が画期的で、意義深いものであり、その参加者の幅広さゆえに、その内容は十分に尊重されるべきものとなった。そのステップは、大きく分けると、1)協働会議の開催、2) 協働のワークショップの開催、3) 協働のハンドブック案の最終合意、4) ハンドブック別冊の作成、の4つとなった。以下に、それらについて記述する。

1) 協働会議の開催

本ハンドブック作成に至った経緯は、2011 年 7 月まで遡る。中部地域では、当時既に、地域の NGO と JICA 中部の間で、協働事業が活発に行われていたが、その協働関係をさらに発展させようとする動きが NGO および JICA 双方にあり、2011 年 7 月 20 日、第一回協働会議が、NANGOC と JICA 中部との間で開催された。この会議には、JICA 中部からは、所長をはじめ、次長、市民参加協力課長、市民参加・民間連携協力アドバイザーが参加、NANGOC 側からは、理事長、副理事長、担当理事などが参加し、「中部 NGO・JICA 中部地域協議会」の設置とともに、中部地域の NGO と JICA 中部とが協働で事業を行う際のより所となる「協働のハンドブック」の作成が合意された。その後、3 回の協働タスク会議(7/29,8/11,9/2)を経て、9 月 20 日に開催された第二回協働会合の場で、多くの関係者が関わって協働のハンドブックを作成することが承認された。

2)協働のワークショップの開催

12 月 28 日には、3 時間に渡る第一回ワークショップを開催。地域の NGO から 8 団体 13 名、JICA 中部からはほぼすべての推進員および調整員を含む 13 名が参加し、1) 地域において NGO と JICA が協働することの意義を確認し、2)これまでの協働の 10 年を振り返り、その効果と課題を共有、3)協働によるシナジー効果を高めるために必要なものを共に考え、協働のノウハウ、大切にすべきポイントをまとめた。第一回ワークショップで話し合われた内容を受け、2012 年 1 月



第一回協働のワークショップの様子(2012 年 12 月 28 日)

に、協働タスクにおいて、協働のハンドブックの試案を作成、JICA 中部、NGO でさらに検討した。2 月 7 日には、第二回ワークショップを開催。NGO 側 8 名、JICA 側 10 名の合計 18 名が参加し、1 月に作成した試案をベースに、EQI 評価法を用いて、ハンドブック案のブラッシュアップを試みた。すなわち、試案の構成及び内容やポイントに関して、文案執筆者より説明を受けた後、1) E (evaluation =良かったところ) を出し合い共有し、2) Q (question=質問したいこと) を出し確認、3) I (idea =よりよくするための提案・代案) を出し合った。

3)協働のハンドブック案の最終合意

第二回ワークショップを受けて、4 チームに分かれて、それぞれの修正案を作成し、それを もとに、NGO 側、JICA 側双方でまとめた後、さらに協働タスクで練り上げ、2 月 26 日に開催さ れた第一回 地域協議会で討議、少数の文言を除き、大部分の記述で合意した。 その後、何回かの調整の後、課題と なっていた部分の修正を経て、ハンドブックのメイン部 分(第一章から第五章まで)が最終化され、2012 年 12 月、公開されるに至った。

4) ハンドブック別冊の作成

各協働事業についての事例集などを別冊として作成した。中部地域協議会のコーディネー タ会議にお いて何度か協議の後、2012 年 12 月までに、事業ごとに、NGO 側、JICA 側双方の 担当者を決め、 原稿を依頼。さらに、コーディネータ会議で、修正の後、NGO、JICA 中部内で 調整の上、最終化した。

以上